

# 清代八股文における破題・承題の 作成法について (4)

On the “Opening the Topic” and “Receiving the Topic” Sections  
of the Eight-Legged Essay (4)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## (IX) 初學採芹集

呉肖元（字は隴龍，号は夢資散人。安徽桐城の人）の『初學採芹集』（乾隆三十八年〔一七七三〕自序）は、自分の引用した用例がすぐれたものであることを述べたいがために、つぎのようにいう。

初學の破〔題〕・承〔題〕は、最も庸腐（凡庸で陳腐）油滑（軽薄）・寛套を弊襲するを忌む。此れ 彼に移す可しとし、彼 此れ亦た通ず可けんや。此れは、彼 絶えて思いを構（めぐら）さず、終身 毫も作意無きなり。蓋し其の試筆（文の練習）して破〔題〕を作りし時、童子は只だ口頭話（口語）を須い、必ずしも〔標準語を用いることを〕苛求（過分に要求）せず。〔しかしこれは〕少年 天性の若きは習い慣れて自●（一字不明：以下同じ）、後に至れば、則ち方に轉ず可からざるを知らざるなり。試みに五方（東、南、西、北、中央の各地域）の言を覲（覲）るに、土音 各々異なれり。成人なるも則ち終身 之を效せば、老儒に似たらず。稚子 初言するの時、齊に置けば則ち齊語し、楚に置けば則ち楚語す。其れ天性●なり。故に鄭氏（鄭玄）の詩婢<sup>①</sup> 恤<sup>うれ</sup>い且つ『詩』を以て語言を爲す。況や性靈（聰明）なるの幼童をや。苟し之に誨うるに以て作意有り・穎思有れば、破題は未だ其の意思を發せざる者有らざるなり。幼くして焉（こゝ）（すぐれた文）を習い、爛套を見て遷（あらた）めず。〔そうすれば〕將來の出語、必ず長老を驚かす。

此れ法を上定の理に取るなり。吾 特に此れを集めて以て後学（學）を開く。願わくは世の師と爲る者、坊刻の破〔題〕・承〔題〕を以て之を悞ること勿れ（『初學採芹集』巻首・九葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

①『世説新語』文學篇に「鄭玄の家の奴婢 皆な書を読む。嘗て一婢を使うに、稱旨（意にそう）せず、將に之に撻たんとするに、方に自から陳説す。〔鄭〕玄 怒り、人をして泥中に曳著せしむ。須臾にして復た一婢の來る有り。問うて曰く「胡ぞ泥中に爲さんや」（『詩經』邶風・式微）と。答えて曰く「<sup>し</sup>ば<sup>こ</sup>く<sup>つ</sup>言に往き慙ぐれば、彼の怒りに逢う」（『詩經』邶風・栢舟）と」。

破題・承題を書くにあたって、初学者は凡庸で陳腐で輕薄で定式をそのまま踏襲することを最も忌まなければならない。そもそも、ある部分の定式を、別のところに移しかえてそれが通じるというのだろうか。これは、思いをめぐらさず、まったく文を作ろうという気にさせないものである。思うに、破題を作る練習をする時、子供にはただ口語を用いて作成させ、必ずしも標準語を用いることを無理に要求しない。しかしこれは、子供というのは、習慣がそのまま性質となり、後になると、まったく変えることができないことを知らないものである。各地域の言語を見ると、それぞれ異なっている。成人になってもずっとその地域の音で話していたなら、老儒のようではない。子供がしゃべり始めた時に齊に育てれば齊の方言でしゃべり、楚に育てれば楚の方言でしゃべる。それは、天性である。鄭玄の家では、その環境によって召使にいたるまで学問があり、なげくのにも『詩經』を引用した。有能な児童たちであれば、環境によることは明白であろう。もしも指導するのに作意・穎思があれば、指導をうけた人たちの書く破題に気持ちがこもらないものはない。小さい時からすぐれた文を学び、常套句を見てもそれになじまないようにする。そうすれば、将来文を書いて、必ず年長者を驚かせる。この方法が上の定理である。私（吳肖元）は、後学のためにこうした作意・穎思のある文を集めておく。八股文を教える人たちは、坊刻（営利出版）の破題・承題を教えて、後学たちを誤らせないことを願うのみである、という。そして、このように述べた後に、用例を示す。

[用例]

題目：子曰『論語』 孺（學）而章 虚冒題 用古分破対破法

匹夫而爲百世師，一言而爲天下法焉（匹夫にして百世の師と爲り，一言にして天下の法と爲す）

[上句:] 「子」字を暗破す。[下句:] 「曰」字を暗破す。

頭注：蘇軾の「潮州韓文公廟（廟）碑」句なり（『初學採芹集』卷首・九葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：孺（學）而時習之（『論語』學而） 単句題 順破合破對下法

孺（學）無間于時，其功亦良苦矣（孺（學）は能く時に<sup>へだて</sup>に間らるる無し，[だから]其の功 亦た良に苦し）

[上句:] 全●を合破す。[下句:] 下の「悦」字に対す。

頭注：「間」は，間断なり（『初學採芹集』卷首・九葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：不亦說乎（『論語』學而） 截上題 合破渾破跟上法

孺（學）有得於心，惟功深者自領其趣也（孺（學） 心に得る有り，惟だ功深き者は自から其の趣を領す）

[上句:] 上に跟（したが）いて「悦（説）」字を暗破す。[下句:] 「不亦・「乎」の眞を破く。

頭注：「領」は，領取なり。「趣」は，趣味なり（『初學採芹集』卷首・九葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：有朋自遠方來（『論語』學而） 単句題 分破明破跟脉法

惟孺（學）動朋，無遠弗届矣（惟だ孺（學）のみ朋を動かす，遠しとして届<sup>いた</sup>

らざるは無し)

[上句:]「朋」字を破く。[下句:]「遠方來」を破く。

頭注:『書[經]』(大禹謨)に「惟德動天,無遠弗届(惟だ德 天を動かすに, 遠しとして届<sup>いた</sup>らざるは無し)」(『初學採芹集』卷首・九葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:不亦君子乎(『論語』學而) 截上題 暗破合破跟脉法

孝(學)至於成德,其品可自信矣(孝(學) 德を成すに至り,其の品 自から信ず可し)

[上句:]「君子」を暗破す。[下句:]「不亦」・「乎」の意を破く。

頭注:『礼記』(樂記)に「德成而上(德 成りて上<sup>かみ</sup>にす)」(『初學採芹集』卷首・十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:本立而道生(『論語』學而) 單句題 倒破明破我(找)上法

知道所由生,則知本之當務矣(道の由り生ずる所を知れば,則ち本の當に務むべきを知る)

[上句:]「道生」を倒破す。[下句:]「本立」・「●●」を分破す。

頭注:なし(『初學採芹集』卷首・十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:巧言(『論語』學而) 單項題 合破明破照下法

言而巧也,心馳於言矣(言にして巧みなるや,心 言に馳す)

[上句:]上面を合破す。[下句:]●●下意。

頭注:「心馳」は,馬の馳驅して收めざるが如きなり(『初學採芹集』卷首・十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:巧言令色(『論語』學而) 二扇題 合破明破含下法

工於言色者,徒飾於外而已(言色に工なる者は,徒だ外を飾るのみ)

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 題意を我(找:補足)して、下に対す。  
 頭注:「工」は、善なり。「飾」は粉飾すること外面粧彩するが如し。「徒」は、  
 専なり(『初學採芹集』巻首・十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:爲人謀而不忠乎(『論語』學而) 兩截題 暗破分破跟脉法

大賢視人猶己、恆慮有未盡之心焉(大賢は人を視るに猶お己のごとくし、恆  
 に未だ盡さざるの心有るを慮<sup>うれ</sup>う)

[上句:]「人」字を破き、「身」字を扣く。[下句:]「忠」字、並びに「不」  
 「乎」の神を暗破す。

頭注:「恆」は、常なり。「慮」は、憂いなり(『初學採芹集』巻首・十葉・「増  
 訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:傳不習(『論語』學而) 截上題 反破倒破跟脉法

自恃爲已習焉、恐負所傳於身矣(自から已に習うと爲すを恃み、身に傳わる  
 所に負<sup>そむ</sup>くを恐る)

[上句:]「習」字を暗破す。[下句:]「傳」字を我(找:補足)し。有不●●。

頭注:「負」は、辜負<sup>そむく</sup>なり(『初學採芹集』巻首・十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」  
 条)。

題目:使民以時(『論語』學而) 単句題 明破合破用古法

使因乎時、民忘其勞矣(使うに時に因れば、民 其の勞を忘る)

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 題旨を我(找:補足)す。

頭注:『易經』(兌卦・彖傳)に「説以犯難(難)、民忘其勞<sup>ママ</sup>(説<sup>よろこ</sup>んで以て難  
 (難)を犯せば、民 其の勞を忘る)」。 (『初學採芹集』巻首・十葉・「増訂採  
 芹捷訣破承題法」条)。

題目:賢賢易色(『論語』學而) 単句題 分破暗破重上法

情一於賢，可極擬其誠焉（情 賢に一にして，極めて其の誠を擬す可し）

[上句:] 上載を曲破す。[下句:] 暗破下●●。

頭注:「一」は，專一なり。「擬」は，●容なり（『初學採芹集』巻首・十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 事父母能竭其力（『論語』學而） ●●題 倒破暗破●下法

不遺餘力，無愧古之公子矣（餘力を遺さず，古の公子に愧ずる無し）

[上句:] 下載を倒破す。[下句:] ●●●●●●。

頭注:「不遺餘力」は，古文に見ゆ（『初學採芹集』巻首・十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 主忠信（『論語』學而） 単句題 合破暗破跟脉法

自修莫主于存誠，學之本又立矣（自修は誠を存するより主なるは莫く，學の本 又た立てり）

[上句:] 題面を暗破す。[下句:] 題旨を我（找:補足）す。

頭注:「主<sup>ママ</sup>於存誠」は，朱子の性理に見ゆ（『初學採芹集』巻首・十一葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 过（過）則勿憚改（『論語』學而） 単句題 分破明破順破法

过（過）不可長，改之勿吝焉（过（過）ちは長くする可からず，之を改むる<sup>やぶさか</sup>に吝なること勿れ）

[上句:] 上載の題意なり。[下句:] 下載の題字なり。

頭注:●●敷不可●。『書經』（仲虺之誥）に「改過不吝（過ちを改むるに<sup>やぶさか</sup>吝ならず）」（『初學採芹集』巻首・十一葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 言可伏也（『論語』學而） 截上題 倒破分破我（伐）上法

难（難）必其伏者而可伏，惟其言之近義也（必ず其の<sup>ふ</sup>伏むを难（難）くする

者にして伏<sup>ふ</sup>む可きは、惟だ其れ言の義に近ければなり)

[上句:] 題面を倒破す。[下句:] 題意を我(找:補足)し、上を抱く。

頭注: なし(『初學採芹集』巻首・十一葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 为(爲)政以德(『論語』爲政) 単句題 合破渾破重下法

政本諸身、治待其原矣(政 <sup>これ</sup> 諸を身に本づけ、治 其の原を待つ)

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 題意なり。

頭注: 「原」は、水の源●有るが如きなり(『初學採芹集』巻首・十一葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 吾十有五(『論語』爲政) 虚冒題 暗破分破照下法

聖人以身立教、因先溯乎幼時焉(聖人 身を以て教を立つるに、因りて先ず幼時に溯る)

[上句:] 通章を冒(総括)し、「吾」字を暗破す。[下句:] 本位を一にす。

頭注: 「溯」は、後より前を追うの意なり(『初學採芹集』巻首・十一葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 色难(難)(『論語』爲政) 二字 単題 分破明破跟脉法

徴孝於色、當思其所以难(難)也(孝を色に徴<sup>かんが</sup>うるに、當に其の难(難)き所以を思うべきなり)

[上句:] 旁破「色」字。[下句:] 破「难(難)」字。

頭注: 「徴」は、考なり。「所以」は、法を考うるに有于(友于:兄弟)の中に受くるなり(『初學採芹集』巻首・十一葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 不違如愚(『論語』爲政) 単句題 暗破合破冒下法

善受聖教者、其象可想見焉(善く聖教を受くる者は、其の象 想見す可し)

[上句:] 上截を暗破す。[下句:] 下截の意を暗破す。

頭注：なし（『初學採芹集』巻首・十一葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：巧笑倩兮美目盼兮（『論語』八佾） 二扇合下題 合破明破含下法

述詩之脉倩盼者，賢者之所已解者也（詩脉の倩・盼なる者を述ぶるは，賢者の已に解する所の解者なり）

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 截下なり。

頭注：なし（『初學採芹集』巻首・十一葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：知其說者（『論語』八佾） 絶下轉関題 合破反破留下法

帝命之难（難）知，圣（聖）人特懸提一知之者也（帝の命の知り难（難）し，  
圣（聖）人 特に懸擬<sup>せんさく</sup>して一に之を知らず者なり）

[上句:] 先ず題意を破く。[下句:] ●●●句題面。

頭注：「懸擬」は，●●擬●也（『初學採芹集』巻首・十一葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：我愛其礼（『論語』八佾） 単●題 順破流水對上法

聖人之心，惟知有礼而已（聖人の心，惟だ礼有るを知るのみ）

[上句:] 「我愛」を暗破す。[下句:] 「礼」字を明破す。

頭注：なし（『初學採芹集』巻首・十二葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：臣事君以忠（『論語』八佾） 單項題 倒破合破重下法

心無不盡，臣極立矣（心 盡くさざる無くして，臣の極 立てり）

[上句:] 「忠」字を倒破す。[下句:] 上截を我（找：補足）す。

（『初學採芹集』巻首・十二葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

頭注：「極」は，一定の準則なり。

題目：天下無道也久矣（『論語』八佾） 單句截上題 倒破渾破留下法



識時関吏、與圣（聖）門論天下（時（時務）を識るの関吏、圣（聖）門と天下を論ず）

[上句:] ●渾 下截●。[下句:] 「天下」字を我（找：補足）す。

頭注: 「関吏」は、抱関の小吏なり（『初學採芹集』巻首・十二葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 观（觀）过（過）斯知仁矣（『論語』里仁） 単句題 反破合破重上法

仁在过（過）中、不观（觀）而後失之也（仁は过（過）の中に在り、观（觀）ずして後に之を失うなり）

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 題意を反破す。

頭注: なし（『初學採芹集』巻首・十二葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 士志於道（『論語』里仁） 虚冒截下題 暗破合破對下法

心乎天下之大美、其人宜自此遠矣（天下の大美を心とすれば、其の人 宜しく此れ〔悪衣・悪食を恥じるようなもの〕<sup>よ</sup>自り遠ざかるべし）

[上句:] 下の三字を渾破す。[下句:] 暗破「●」字注下。

頭注: 「大美」は、道を指すなり（『初學採芹集』巻首・十二葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 而恥惡衣惡食者（『論語』里仁） 截上下題 合破順破合下法

恥非所恥、衣食中人而已（恥ずる所に非ざるを恥ずるは、衣食中の人なるのみ）

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 破題意●。

頭注: なし（『初學採芹集』巻首・十二葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 放於利而行多怨（『論語』里仁） 単句兩截題 合破明破兩對法

惟利招怨、惟放益多矣（惟だ利のみ怨みを招き、惟だ<sup>よ</sup>放るのみなれば益ます）

多し)

[上句:] 題の下載を合破す。[下句:] 上載なり。

頭注:「招」は、招致なり。「益多」は、多くを起こすなり(『初學採芹集』卷首・十二葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:遊必有方(『論語』里仁) 単句題 合破明破我(找:補足)上法

遊不易方、仍然不遠遊之意而已(遊するに不易の方とは、仍然(やはり)遠遊せざるの意なるのみ)

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 上を我(找:補足)し、題●を取る。

頭注:「不易」は、君子 不易の志を立つるなり(『初學採芹集』卷首・十二葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:瑚璉也(『論語』公冶長) 単句題 合破渾破對上法

器兼二代、品高千古矣(器 二代を兼ね、品は千古より高し)

[上句:] 題●渾似。[下句:] 「也」字の神を破く。

頭注:「二代」は、夏・商なり

題目:宰我晝寢(『論語』公冶長) 記事題 合破斷破射下法

俾晝作夜、一寢少一晝矣(晝をして夜と作さしむれば、一寢に一晝を少く)

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 題意を我(找:補足)す。

頭注:『書(詩經)』に「俾晝作夜(晝をして夜と作さしむ)」(『(詩經)』大雅蕩)。「俾」は使なり(『初學採芹集』卷首・十三葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:舊令尹之政(『論語』公冶長) 三句題 滾作題 合破渾破照下法

大夫無忘国之心、於去位見之矣(大夫 国を忘るの心無し、位を去るに於いて之を見る)

[上句:] 題意を渾破し、「忠」字を破く。[下句:] 渾破なり。

頭注：なし（『初學採芹集』巻首・十三葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：仲弓問子桑伯子（『論語』雍也） 記事題 渾破合破取補法

取己己之人以相證，其意不在人也（己に似たるの人を取り以て相い證す，其の意は人（子桑伯子）に在らざるなり）

[上句:] 題面を渾破す。[下句:] 題意を我（找：補足）す。

頭注：「意不在人」句は，歐文醉翁（歐陽修）の意に本づく（「論討蠻賊任人不一札子〔慶曆四年〕に「若所遺皆是才者，則用才不在人多」），酒意に在らず（『初學採芹集』巻首・十三葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：居敬而行簡 三句（『論語』雍也） 渾作題 倒破明破対下法

大賢論臨民之道，有善於簡者也（大賢 民に臨むの道を論じ，簡に善なる者有るなり）

[上句:] 下句を倒破す。[下句:] 上句を破き，下に対す。

頭注：なし（『初學採芹集』巻首・十三葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：堯舜其猶（猶）病諸（『論語』雍也） 単句截上題 合破渾破我（找）上法

極聖（聖）之至而猶（猶）未至焉，則仁亦難（難）言之矣（極聖（聖）の至りにして猶（猶）お未だ至らざるがごときなれば，則ち仁も亦た之を言い難（難）し）

[上句:] 題面を渾破す。[下句:] 我（找：補足）して題意を破く。

頭注：なし（『初學採芹集』巻首・十三葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：富而可求也（『論語』述而） 単句截下題 合破虚扣対下法

欲返求富者之心，不妨留其可也（富を求むる者の心に返らんと欲し，其の可なるを留めるを妨げざるなり）

[上句:] 題意を渾破す。[下句:] ●破題位。

頭注:「返」は、之を挽回して轉ぜしむるなり(『初學採芹集』卷首・十三葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 樂以忘憂(『論語』述而) 単句題 明破分破抱上法

樂以孝(學)而生, 憂以樂而忘也(樂 孝(學)を以て生じ, 憂 樂を以て忘るるなり)

[上句:] 上を明破す。[下句:] 下の「●」字を破き, 上を抱く。

頭注: なし(『初學採芹集』卷首・十三葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 亡而為(爲)有(『論語』述而) ●題 分破順破明破法

不安於亡者, 恐終身不得為(爲)有也(亡<sup>な</sup>きなるに安からざる者は, 終身有りとな<sup>な</sup>為(爲)すを得ざるを恐るるなり)

[上句:] 上截を分破す。[下句:] 下截を破き, ●題意。

頭注: なし(『初學採芹集』卷首・十三葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 当暑袵絺綌(暑に當りては袵<sup>しん</sup>にして絺綌<sup>ちぎき</sup>もてす)(『論語』鄉黨) 単句  
諸事題 合破順破注下法

記聖(聖)人当暑之服, 其外則猶夫人也(聖(聖)人の暑<sup>あた</sup>に當るの服を記し, 其の外[出する時]は則ち猶お夫人(衆人)のごときなり)

[上句:] 題面●破。[下句:] 題意を暗破す。

頭注: なし(『初學採芹集』卷首・十三葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 布(『論語』鄉黨) 一字枯窘題 明破用古跟上法

大布之衣, 昭其潔也(大布の衣, 其の潔を昭にするなり)

[上句:] 題面を破き。[下句:] 題意を破く。

頭注:「左傳」(閔公二年)に「衛文公は大布之衣・大帛之冠にて[…]'。又た「其

の潔を昭らかにす」(『初學採芹集』巻首・十四葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目：如用之則吾從先進 (『論語』先進) 轉関結穴題 明破对上取神法

圣(聖)人用礼樂之中，欲與斯世正所從也(圣(聖)人 礼樂の中を用い，  
斯の世と從う所を正さんと欲するなり)

[上句:] ●●破上截。[下句:] ●●不●題者。

頭注：なし(『初學採芹集』巻首・十四葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目：南容三復白圭(南容 白圭[の詩]を三復す)」(『論語』先進) 記事  
題 渾破合破貼切法

不敢玷於言者，其人如玉矣(敢て言に<sup>か</sup>玷けざる者は，其の人 玉の如し)

[上句:] 倒破渾不下●。[下句:] ●合破上一字。

頭注：『詩[經]』(大雅・抑)に「斯言之玷，不可為(爲)也(斯言の<sup>か</sup>玷くる  
は，<sup>おさ</sup>為(爲)む可からず)」。又た「其人如玉(其の人 玉の如し)」(『詩[經]』  
小雅・白駒)(『初學採芹集』巻首・十四葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目：子路問聞斯行諸(子路 問う，聞かば<sup>すなわ</sup>斯ち諸を行なわんか)(『論語』先進)

記事伏案題 渾破切題摹神法

勇士志在必行，特舉所聞以相質焉(勇士 志は必ず行なうに在り，特に聞く  
所を舉げて相い質す)

[上句:] 下を伏し，題神を渾破す。[下句:] 下破●●。

頭注：「質」は，質当なり(『初學採芹集』巻首・十四葉・「増訂採芹捷訣破  
承題法」条)。

題目：冉有問，聞斯行諸(『論語』先進) 記事伏案題 渾破切題摹神法

賢者志不在行，姑卽所聞而問焉(賢 志は行うに在らざれば，姑く聞く所  
に卽きて問う)

[上句:] 下を伏し題神を渾破す。[下句:] ●扣題位。

頭注: 上句は亦た歐(歐陽脩)の文の意を用う(『初學採芹集』卷首・十四葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 子貢問 [曰] 師與商也孰賢(『論語』先進) 平寓側題 寓側渾破取神法

意中有独賢之士, 姑即兩人以相較焉([子貢の] 意中に独り賢とするの士(師: 子張) 有るも, 姑く即ち兩人もて以て相い<sup>はか</sup>較る)

[上句:] 先ず題意を破く。[下句:] ●●破下面。

頭注: 「較」は, 高下を量るなり(『初學採芹集』卷首・十四葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 浴乎沂(『論語』先進) 單頂題 倒破合破用古法

志在流水, 其志潔矣(志は流水に在り, 其の志は潔し)

[上句:] 脉に跟着いて暗破す。[下句:] 「沂」字・「浴」字。

頭注: 『初學(學)記』に(卷十六・樂部下・琴第一・事對・「落霞流水」条)に「伯牙鼓琴, 志在流水」。『史記』に「潔其行芳(其の行芳を潔くす)」(『史記』には見あたらない。いまのところ明・孫繼皋の『宗伯集』卷七に収める「華節母陸孺人墓表」が初見である)(『初學採芹集』卷首・十四葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 草上之風(『論語』顔淵) 單句載脚題 明破跟脉點睛法

草王于受, 風爲政矣(草 受くるを王とすれば, 風 政と爲すなり)

[上句:] 題面を破く。[下句:] 跟●, 題意を破く。

頭注: なし(『初學採芹集』卷首・十四葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 憲問恥(『論語』憲問) 亭題 總破明破切題法

以知恥之人而問，恥狷也而進求狂矣（恥を知るの人を以て問うに，狷を恥じて進みて狂を求む）

[上句:] ●破●題。[下句:] 題意を破く。

頭注:「狷」は，狷介なり。「狂」は，狷狂なり<sup>①</sup>（『初學採芹集』巻首・十四葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

①題目となっている『論語』憲問・「憲問恥」条の朱注に「憲，原思名。穀，祿也。邦有道不能有爲，邦無道不能獨善，而但知食祿，皆可恥也。憲之狷介，其於邦無道穀之可恥，固知之矣。至於邦有道穀之可恥，則未必知也。故夫子因其問而并言之，以廣其志，使知所以自勉，而進於有爲也（憲は，原思の名，穀は，祿なり。邦に道有りて爲す有ること能わず，邦に道無くして獨り善くすること能わず，而して但だ祿を食することを知るは，皆な恥ず可きなり。憲の狷介，其の邦に道無くして之を穀するの恥ず可きに於いて，固より之を知れり。邦に道有りて之を穀する恥ず可きに至りては，則ち未だ必ずしも知らざるなり。故に夫子 其の問に因りて并せて之を言い，以て其の志を廣くし，自から勉めて，爲すこと有るに進む所以を知らしむるなり）」。また、『論語』子路に「子曰，不得中行而與之，必也狂狷乎，狂者進取，狷者有所不爲也（子 曰く，中行を得て之に<sup>くみ</sup>與せずんば，必ずや狂狷か。狂者は進んで取り，狷者は爲さざる所有り）」。

題目：唯上知與下愚不移（『論語』陽貨） 單句題 渾破獨醒題旨法

天下多可移之人，人當慎習以伏<sup>ママ</sup>（復）性矣（天下 移す可き人多し，人當に慎しみて習い以て性に伏<sup>ママ</sup>（復）すべし）

[上句:] 渾破，取伏（復）●字。[下句:] 渾して題意を我（找：補足）す。

頭注:「慎」は，謹慎なり。「伏<sup>ママ</sup>（復）」は，本然の性に伏<sup>ママ</sup>（復）するなり（『初學採芹集』巻首・十五葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：以季・孟之間待之（『論語』微子） 單句截上題 渾破獨清題界法

定所以待聖人者，亦厚于待聖矣（<sup>あしら</sup>聖人を待つ所以を定むる者，亦た<sup>あしら</sup>聖を待つに厚し）

[上句:] 題界を截清す。[下句:] 題位を渾出す。

頭注:なし（『初學採芹集』巻首・十五葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：鳳兮鳳兮（『論語』微子） 単句題 明破合破映合法

能知鳳而歌之，則亦非凡鳥也（能く鳳を知りて之を歌う，則ち亦た凡鳥に非ざるなり）

[上句:] 題面を破く。[下句:] 題字を暗點す。

頭注：昔人 其の門に題するに「鳳」字を以てする者有り。其の人 喜ぶ。其の兄 之を解して曰く，「鳳」字は，「凡」に従い，「鳥」に従う。乃ち汝を詆りて「凡鳥」と為（爲）すのみ（『初學採芹集』卷首・十五葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

①凡鳥：「鳳」の拆字（鳳＝凡＋鳥）。庸才の意味。『世說新語』簡傲篇に「嵇康與呂安善，每一相思，千里命駕。安後來，值康不在，喜出戶延之，不入。題門上作「鳳」字而去。喜不覺，猶以爲忻。故作「鳳」字，凡鳥也（嵇康と呂安と善し。毎に一たび相い思えば，千里なるも命もて駕す。[呂] 安 後に来るも，[嵇] 康の不在に値る。[嵇康の兄の嵇] 喜 戸より出で之を延くも，入らず。題して門上に「鳳」字を作りて去く。[嵇] 喜 覺らず，猶お以て忻と爲す。故さらに「鳳」字を作すは，[嵇喜が] 凡鳥（鳳＝凡＋鳥）なればなり」）。

題目：趨而避之（『論語』微子） 単句題 明破合破跟脉法

歌鳳者伏（復）避鳳，亦終非鳳侶也（鳳を歌うは伏（復）た鳳を避く，亦た終に鳳の侶に非ざるなり）

[上句:] 脉に跟着いて題面を破く。[下句:] 題意を暗破す。

頭注：「侶」は，伴侶なり（『初學採芹集』卷首・十五葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：君子而時中（『中庸』第二章） 単句題 明破倒破用古法

與時偕行，中庸屬之君子矣（時と偕に行くは，中庸 之れを君子に屬すればなり）

[上句:] ●破下載。[下句:] 上載なり。



頭注:『易』(乾卦文言傳 / 損卦彖傳 / 益卦彖傳)に「與時偕行(時と偕<sup>とも</sup>に行く)」と。「偕」は、並びになり、同じきなり(『初學採芹集』卷首・十五葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:沛然下雨(『孟子』梁惠王上) 単句題 合破用古我(找)上法

大雨時行, 天已不屯其膏矣(大雨 時に行かば, 天 已に其の膏を屯せず)

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 「天」字を一にし, 題意を破く。

頭注:『礼 [記]』(月令)に「大雨時行(大雨 時に行く)」と。『易』(屯卦九五爻辭・象傳)に「屯其膏(其の膏を屯す)」と。閉塞の意なり(『初學採芹集』卷首・十五葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:有牽牛而过(過)堂下者(『孟子』梁惠王上) 抜引題 順破用古我(找)上法

爾牛來思, 可以觀(觀)堂上之德(爾の牛 <sup>きた</sup> 來り, 以て堂上の德を觀(觀)る可し)

[上句:] 上截を明破す。[下句:] ●破下●跟原。

頭注:『詩 [經]』(小雅・無羊)に「爾牛來思(爾の牛 <sup>きた</sup> 來る)」と。「思」は, 語●なり(『初學採芹集』卷首・十五葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:出入相友(『孟子』滕文公上) 単句題 合破用古切題法

同人於野敦, 友誼於田間矣(同人 野に於いて敦く, 友誼 田に於いて間<sup>へだ</sup>てらる) [上句:] 題面を合破す。[下句:] 題意を破く。

頭注:『易經』(同人卦辭)に「同人于野(人に同じくするに野に于いてす)」と。「敦」は, 敦厚なり(『初學採芹集』卷首・十五葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目:大孝終身慕父母(『孟子』萬章上) 単句題 明破分破眞切法

大孝之慕親, 終身一孩提也<sup>①</sup>(大孝の親を慕うは, 終身一の孩提なればなり)

[上句:] 題面を合破す。[下句:] 題を我(找:補足)す。

頭注:「孩提」は、孩童の提攜(携)するの時なり(『初學採芹集』卷首・十五葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

①題目の截去された上文は「人少則慕父母，知好色則慕少艾，有妻子則慕妻子，仕則慕君，不得於君則熱中，大孝終身慕父母（人<sup>わか</sup>少ければ則ち父母を慕い，好色を知れば則ち少艾を慕い，妻子有れば則ち妻子を慕い，仕うれば則ち君を慕い，君に得ざれば則ち熱中（あせて気をもむ）す。大孝は終身 父母を慕う）」とある。

題目: 丹朱之不肖 二句 (『孟子』萬章上) 兩扇題 渾破合用古法

勳華之後，难(難)爲繼矣（[放] 勳(堯)・[重] 華(舜)の後，繼爲るは难(難)し）

[上句:] 渾破●●●。[下句:] 下截を我(找:補足)す。

頭注:『書經』に堯を「放勳」と曰い，舜を「重華」と曰う。『漢書』に「●●●●●●●」と(『初學採芹集』卷首・十六葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 鼻之于臭也 (『孟子』盡心下) 單句題 ●破渾破確切法

氣與氣相感，而鼻有專司矣（氣と氣と相い感ず，鼻 專司有ればなり）

[上句:] なし。[下句:] ●我(找)上截。

頭注:「司」は，管理するなり(『初學採芹集』卷首・十六葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

### (x)『學海津梁』・『斯文規範』・『搭題文模了然』

崔學古の編輯した『學海津梁』(康熙三十四年(一六九五)序)は，破題・承題をつぎのように説明する。

破承 題[目]の主意を擒える處なり。破[題]は穩を要し，承[題]は醒むるを要す。逆破なれば則ち順承なり。順破なれば則ち逆承なり。正破なれば則ち反承なり。反破なれば則ち正承なり(『學海津梁』卷三・六葉・「入法」条)。

破題・承題は、題目の主旨をとらえるところである。破題は穩当で、承題は覚醒させることが必要である。破題を逆破で破いたら、承題は順承で承ける。破題を順破で破いたら、承題は逆承で承ける。破題を正破で破いたら、承題は反承で承ける。破題を反破で破いたら、承題は正承で承ける、という。

さらに王茂修（字は允徳。直隸博陵の人）は、『斯文規範』（康熙五十九年（一七二〇）自序）において、破題をつぎのように説明する。

破題は、一兩句の話を<sup>と</sup>用いて題〔目〕の大畧を括盡するなり。然れども其の法 亦た一ならず。上句もて題面を破き、下句もて章旨に入る者有り。上句もて章旨に入り、下句もて題面を破く者有り。上句もて題面を破き、下句もて題意を破く者有り。上句もて題意を破き、下句もて題面を破く者有り。更に順破・逆破・反破・正破・暗破なる者有り。法は一ならず。總じて渾融（融合）簡括（簡要で概括的）なるを要す。題中の字面を挑出す可からず（『斯文規範』卷之三・七葉・「一曰論破題」条）。

破題は、二句で題目の大略をまとめつくすものである。しかし、その方法はひとつではない。上句で題面を破き、下句で章旨に入る方法がある。上句で章旨に入り、下句で題面を破く方法がある。上句で題面を破き、下句で題意を破く方法がある。上句で題意を破き、下句で題面を破く方法がある。さらに、順破・逆破・反破・正破・暗破などがあり、解法はひとつではない。融合させて簡要で概括的であることが求められる。また、題目の字面（文字）は、書き出すべきではない、という。

また、搭題<sup>(1)</sup>についてであるが、『搭（搭）題文模了然』（光緒十三年（一八八七）新鐫）によると、搭題の破題・承題はつぎのように説明される。

#### 作破承説

反破は正承し、正破は反承す。破題は題面を破き、承題は題意を詳しくす。固より言を待たず。截搭題の破・承は、則ち融析を以て上と爲す。愈いよ周全なれば、愈いよ妙然たり。必ず簡捷（簡潔で直截的）とす。愈いよ融洽すれば、愈いよ妙然たり。須らく部位（次序）を分清（はっきりする）

にすべし（『搭題文模了然』巻一・一葉・「作破承説」条）。

破題が反破であれば、承題は正承する。また、破題が正破であれば、承題は反承する。破題は題面を破き、承題は題意を詳しくする。これらのことは、もとよりいうまでもないことである。截搭題における破題・承題は、融析を上とする。周到であればあるほど精妙となる。必ず簡潔直截的にすべきである。そして融合すればするほど精妙となる。それぞれの位置を分別してはっきりさせるべきである、という。

そうして、破きかたとして「明破法」・「暗破法」・「對破法」・「串破法」・「一明一暗法」・「交互破法」・「反破法」・「抱上破法」・「照下破法」をあげて、いろいろな搭題についての解法を示す。ただし、ここで挙げられている用例は、承題とひとつになっている。そこで、用例については「承題」の『搭題文模了然』条で検討したい。

- ✓（１）搭題とは、『四書』の文章の前句の後と、後句の頭とをくつつけたり、前章の末を切り取り、後章の頭に載せたり、二・三章を飛び越してくつつけたりして題目とするものである。ある程度、意味が通じているものを「有情」といい、意味が通らないものを「無情」という。たとえば、王企乚（山西安邑の人。貢生）の『文家模範』（乾隆三十一年〔一七六六〕刊）では、「搭題」としてつぎのようなものを例示する。

『論語』述而の、

子所雅言，詩書執禮，皆雅言也。

葉公問孔子於子路，子路不對。子曰：女奚不曰，其爲人也，發憤忘食，樂以忘憂，不知老之將至云爾。

子曰：我非生而知之者，好古敏以求之者也。

という連続する三章から「搭題」を出題すると、

「隔章有情搭題」であれば、

不知老之將至云爾。子曰：我非生而知之者

というように、二章の下から、三章の上までをすこし意味がつらなる部分を題目とする。

また、「隔章無情搭題」であれば、

皆雅言也。葉公問孔子於子路

のように、一章の下から、二章の上までの意味のつながらない部分を題目とする。

ただし、この「搭題」はいろいろな区切り方を行なって出題されるので、いま引用したようなものだけではない。

## (2) 破題における代字

題目に「孔子」・「堯」・「舜」などの言葉があると、破題では、別の字に代えてその名前を表さなければならなかった。商衍鎰（字は藻亭、号は又章、または冕臣。晩年には康樂老人と自称する。廣州駐防の正白旗漢軍出身。一八七五年～一九六三年。光緒三十年〔一九〇四〕甲辰恩科の一甲三名（探花））は、次のように述べる。

破題は聖賢・諸人に於いて須く代字を用うべし。其の名を直指す可からず。堯・舜は則ち帝と稱し、孔子は則ち聖人と稱すの類の如し。承題は則ち之を直言す、堯・舜なれば、直ちに堯・舜と稱し、孔子は直ちに孔子と稱するが如し。其の餘の諸人も此れに仿い、復た避忌無きなり（『清代科舉考試述録』第七章八股文、試帖詩概紀及舉例釋義 第一節 八股文之源流・生活讀書新知三聯書店・一九五八年・二三二頁）。

題目の記された聖賢について、破題の箇所では代字を用いるべきである。ただちに聖賢の名を記してはいけない。それはたとえば、「孔子」を「聖人」に、「堯」・「舜」を「帝」と置き換えるようにするのである。破題に続く承題の箇所では、そのまま記す。「孔子」は「孔子」とし、「堯」・「舜」は「堯」・「舜」とするのである。

この破題における代字が、明代初期から行なわれていたのかははっきりしない。<sup>(2)</sup>ただ、明・嘉靖年間（一五二二年～一五六六年）に貴州で出版された『黔中考課』甲集（四十五葉）に『論語』衛靈公の、

(2) いま目睹できる明代の初期・中期の八股文は、主に清代になって出版された八股文の選集に収められたものによっている。ただ八股文は、個人の著したものという意識があまりなかったためなのか、きわめて低く評価されてきた。そのため、選集に収めるたびに、編集者によってかなり容易に文章の改変が行なわれている。

こうしたことからすると、いま見ることのできる明代の八股文が本来の姿を伝えているかはよくわからないと、私は考える。

『黔中考課』甲集は、明・嘉靖年間（一五二二年～一五六六年）に貴州で刻された八股文の選集であり、この八股文はたしかな明代のものであると考え、ここで引用した。

子貢問爲仁。子曰、工欲善其事、必先利其器。居是邦也、事其大夫之賢者、友其士之仁者（『論語』衛靈公）

を題目とする單句題に、呉鉉は、つぎのように代字を用いて破題を書いている。

聖人告賢者爲仁、惟先所資而已（聖人 賢者に仁を爲すを告ぐるに、惟だ資とする所を先とするのみ）

呉鉉は、ここで子貢を「賢者」と置き換え、孔子を「聖人」としている。

ここからすると明・嘉靖年間にはすでに破題の代字が行なわれていたようである。

いずれにせよ、清代になると、はっきりと代字を用いて、破題が書かれる。そのため、詳しい代字の説明も行なわれるようになる。以下で、それぞれの入門書で、代字に言及した箇所を検討してみたい。

### （i）『初學玉玲瓏』

徐瑄の『初學玉玲瓏』（乾隆十五年〔一七五〇〕序）では、題目にあらわれた固有名詞などをつぎのように言いかえるべきだという。

[代字]

○孔子は、「聖人」と破く。<sup>と</sup>顔子・孟子・曾子・子思は「大賢」と破く。其の餘の凡そ孔子の弟子は「賢者」と破く。孟子の弟子は「門人」と破く。堯の若きは「唐帝」と破く。舜は「虞帝」と破く。或いは「古帝」も亦た可なり。禹は「夏王」と破く。湯は「商王」と破く。文[王]・武[王]は「周王」と破く。周公は「元聖」と破く。[魯の]哀公・景公・靈公は「魯君」と破く。齊君・衛君・齊桓・晋文は「伯者」と破く。官名有る者は時官で破く。季氏等の類は「大夫」と破く。[長]沮・[桀]溺・丈人・荷貴・接輿は「隱士」と破く。狂士・淳于髡の類は「辨士」と破く。楊朱・墨翟は「異端」と破く。匡章・陳仲子の類は「齊人」と破く。此れ一定不易の稱なり（『初學玉玲瓏』不分卷・一葉・「破題」条）。

聖人：孔子。

大賢：顔子・孟子・曾子・子思。

賢者：前者以外の孔子の弟子。

門人：孟子の弟子。

唐帝：堯。

虞帝もしくは古帝：舜

夏王：禹

商王：湯

周王：文王・武王

元聖：周公

魯君：魯の哀公・景公・靈公

伯者：齊君・衛君・齊桓公・晋文公

某官：官職名があるものはその官職で「某官」という

大夫：季氏など

隱士：長沮・桀溺・丈人・荷蕢・接輿

辨士：狂士・淳于髡など

異端：楊朱・墨翟

齊人：匡章・陳仲子の類

## (ii) 『夢雲軒管見録』

浙江山陰の張商霖の同治十年（一八七一）刊『夢雲軒管見録』（各頁の柱と封面とは『雲路指南』とする：道光二十一年（一八四一）の湯金釗序）では、「破題に一定の字法有り」として、題目にあらわれた固有名詞などをつぎのように言いかえるべきだという。

破題に一定の字法有り。孔子の如きは、「聖人」と稱す、或いは單に「聖」字を稱す。羣聖と比べ論ずる處なれば、則ち「至聖」と稱す。顔子・曾子・子思・孟子は「大賢」と稱す。閔子・子有子は亦た「大賢」と稱す。其餘の凡ての孔<sup>すべ</sup>[子の]弟子は皆な「賢者」と稱す。二人 並列すれば則ち「兩

賢」と稱す。數人 並列すれば則ち「諸賢」と稱す。惟だ子路は或いは「勇士」と稱し、子貢は或いは「達士」と稱す。曾皙は或いは「狂士」と稱し、原思は或いは「狷士」と稱し、伯魚は「聖嗣」と稱す可し、曾元は「賢嗣」と稱す可し。從者の小子・二三子及び曾子・子夏の弟子と凡ての孟子の弟子に至れば、則ち皆な「門人」と稱す。堯は「唐帝」と稱す。或いは「古帝」と稱す、或いは單に「帝」と稱す。舜は「虞帝」と稱す。堯・舜 並び紀せば則ち「二帝」と稱す。禹は「夏王」と稱す。湯は「商王」と稱す。武丁は「殷王」と稱す。文王・武王は「周王」と破く。夏・商・周 並び紀せば則ち「三王」と稱す。文〔王〕・武〔王〕 並び紀せば則ち「二聖」と稱す、或いは「二王」と稱す。伊尹・周公は「元聖」と稱す。伯夷・叔齊は「古人」と稱す、或いは「古聖」と稱す。伯夷は『孟子』の書中に在れば則ち「清聖」と稱す。柳下惠は「和聖」と稱す。齊桓・晉文・秦穆は「霸主」と稱す。其の餘の凡ての列國の君は則ち皆な「君」と稱し、其の國の名を上に加う。惟だ句踐及び孟子の時の齊・梁の君は則ち「王」と稱し、上に國名を加う。滕文公の世子爲りし時は、當に「儲君」・「嗣君」と稱すべし。神農は「古帝」と稱す。太王・公劉・王季は「古侯」と稱す。泰伯は「古人」と稱す。益稷・契・樂陶は「古聖」と稱す。老彭は「商賢」と稱す。左邱明・公明儀は「魯賢」と稱す。亥唐は「晉賢」と稱す。龍子は「古賢」と稱す。萊朱は「古賢」と稱す。太公・散宜生は「周臣」と稱す。管仲・晏子は「霸佐」と稱す。其の餘の列國の大夫は皆な「大夫」と稱し、一國の名を其の上に加う。其の官職有りて大夫爲るに非ずして孔子・孟子と時を同じくする者は俱に時官を稱す。惟だ王孫賈・陽貨等は「權臣」と稱す。祝鮀・陳賈等は「佞臣」と稱す。宋朝・王驩等は「倖臣」と稱す。嬖奚は「嬖人」と稱す。師摯等は「樂官」と稱す。子濯孺子は「鄭將」と稱す。庾公之斯は「衛將」と稱す。凡ての力有る者は「力士」と稱す。或いは「勇士」と稱す。辨を善くする者は「辨士」と稱す。遊説する者は「説士」と稱す。或いは「策士」と稱す。陳良は「楚士」と稱す。或いは「楚儒」と稱す。王良・奕秋等は「藝



士」と稱す。楊〔朱〕・墨〔翟〕・許行は「異端」と稱す。凡ての官爵無く  
 孔子・孟子と時を同じくする人は皆な「時人」と稱す。隱逸する者は「隱  
 士」と稱す。書中の起首に「曰」字無きは俱に「記者」と稱す。「或曰」・「或  
 問」有る者は則ち「或人」と稱す、亦た「時人」と稱す。周任・夏諺は「古  
 語」と稱す。南人・齊人は「方言」と稱す。『大學』首章は「聖經」と稱す。  
 餘は「傳者」と稱す。『中庸』の「子曰」字有る者は「聖人」と稱す。「子曰」  
 字無き者は「中庸」と稱す。或いは「大賢」と稱す。一切は備載する能わず。  
 當に類に依りて之を辨ずべし。人名の外、又た物類有り。禽獸・草木・鱗  
 介・昆蟲以て金玉・器用・飲食・衣服等に及ぶが如きまで、皆な「物」と  
 稱す。其の題目 必ず須らく分別すべき者は、則ち飛ぶ者には「飛族」と  
 稱し、甲ある者には「介族」と稱す。俱に類推す可し。射・御・博・奕に  
 至れば則ち「藝事」と稱す。禮樂・政事は則ち仍お其の字を以て直ちに之  
 を稱するのみ（『夢雲軒管見錄』卷五・二葉～四葉・逐字啓蒙・「破題法」条）。

聖人：孔子

聖：孔子

至聖：孔子を他とくらべる時

大賢：顔子・曾子・子思・孟子・閔子・有子

賢者：孔子の弟子

兩賢：孔子の弟子二人を並列して指す時

諸賢：孔子の弟子数人を指す時

勇士：子路

達士：子貢

狂士：曾皙

狷士：原思

聖嗣：伯魚

賢嗣：曾元

門人：從者の小子・二三子、曾子・子夏の弟子とすべての孟子の弟子

唐帝：堯

古帝：堯

帝：堯

虞帝：舜

二帝：堯・舜を並列して指す時

夏王：禹

商王：湯

殷王：武丁

周王：文王・武王

三王：夏・商・周をあわせて指す時

二聖：文王・武王を並列して指す時

二王：文王・武王

元聖：伊尹・周公

古人：伯夷・叔齊

古聖：伯夷・叔齊

清聖：『孟子』から伯夷が出題された時

和聖：柳下惠

霸主：齊桓・晉文・秦穆

某君：齊桓・晉文・秦穆以外の列国の君主

某王：句踐および孟子の時の齊・梁の君

儲君：滕文公が世子の時

嗣君：滕文公が世子の時

古帝：神農

古侯：太王・公劉・王季

古人：泰伯

古聖：益稷・契・樂陶

商賢：老彭

魯賢：左邱明・公明儀

晉賢：亥唐

古賢：龍子

古賢：萊朱

周臣：太公・散宜生

霸佐：管仲・晏子

某国大夫：上記以外的大夫は「某国大夫」とし、國名を上に加える

時官：官職があるものの「大夫」ではなく、孔子・孟子と時を同じくする者

權臣：王孫賈・陽貨など

佞臣：祝鮀・陳賈など

佞臣：宋朝・王驩など

嬖人：嬖奚

樂官：師摯など

鄭將：子濯孺子

衛將：庾公之斯

力士：すべての力がある者

勇士：すべての力がある者

辨士：能弁な者

説士：遊説する者

策士：遊説する者

楚士：陳良

楚儒：陳良

藝士：王良・奕秋など

異端：楊朱・墨翟・許行

時人：すべての官爵がなく孔子・孟子と時を同じくする人

隱士：隱逸する

記者：書中のあたみに「曰」字がないもの

或人：「或曰」・「或問」とあるもの

時人：「或曰」・「或問」とあるもの

古語：周任・夏諺

方言：「南人有言」・「齊人有言」とあるもの

聖經：『大學』首章

傳者：『大學』首章以外

聖人：『中庸』の「子曰」字がある時

中庸：『中庸』の「子曰」字のない時

大賢：『中庸』の「子曰」字のない時

物：禽獸・草木・鱗介・昆蟲・金玉・器用・飲食・衣服などに及ぶまで

飛族：「物」類で出題の内容の上からどうしても区別しなければならないもの  
で飛ぶ者

介族：「物」類で出題の内容の上からどうしても区別しなければならないもの  
で甲がある者

藝事：射・御・博・奕

禮樂・政事は、其の字でそのまま指し示す

### (iii) 『童子問路』

鄭之琮の『増註童子問路』（光緒六年〔一八八〇〕新鐫）は、題目にあらわれた固有名詞などをつぎのように言いかえるべきだという。

[破題稱呼]

孔子は「聖人」と破く。<sup>と</sup>或いは單に破くに「聖」の字もて「聖心」・「聖教」・「聖言」・「聖容」の類の如くす、<sup>こ</sup>是れなり。羣聖と比べ論ずる處なれば、則ち「至聖」と破く。[それは]羣聖に別つ所以なり。

顔子・曾子・子思・孟子・閔子騫・有若は俱に「大賢」と破く。

冉伯牛・仲弓・南容・子夏・子貢・樊遲・子游・子路・子張・冉有・公冶長・子賤・宰予・漆雕開・公西華・申枨・巫馬期・[琴] 牢・曾皙・子羔・司

馬牛は俱に「賢者」と破く。惟だ申枨・子禽は或いは「門人」と破き、伯魚は「聖嗣」と破き、又た「琴」牢と曾皙とは或いは「狂士」と破く。兩賢並び稱されれば、則ち「二賢」と破き、數人なれば、則ち「羣賢」と破く。従者・小子・二三子は俱に「門人」と破く。

萬章・樂正子・公孫丑・陳臻・徐辟・充虞・高子・公都子・彭更・咸丘蒙・桃應・屋廬子・陳代は俱に「門人」と破く。

堯は「唐帝」と破く。舜は「虞帝」と破く。堯・舜並び稱されれば、則ち「二帝」と破く。神農は「古帝」と破く。禹は「夏王」と破く。

湯は「商王」と破く。武丁は「殷王」と破く。文[王]・武[王]は「周王」と破く。三代並びに稱されれば、則ち「三王」と破く。文[王]・武[王]並び稱されれば、則ち「二聖」と破く。益契・皐陶は「虞臣」と破く。后稷は「古聖」と破く。禹・稷並びに稱されれば「二聖」と破く。伊尹・周公は「元聖」と破く。伯夷・叔齊・柳下惠は「古聖」と破く。泰伯・虞仲・朱張・夷逸・微子・比干・箕子は「古人」と破く。齊桓公・晉文公・秦穆公は「霸主」と破く。魯昭公・定公・哀公・繆公・平公は「魯君」と破く。齊景公・簡公は「齊君」と破く。梁惠王・襄王は「梁王」と破く。齊宣王は「齊王」と破く。滕定公・文公は「滕君」と破き、世子爲りし時は「儲君」と破く。

管仲・晏平仲・陳文子は俱に「齊大夫」と破く。季文子・季桓子・季康子・孟獻子・孟莊子・孟武伯・孟敬子・藏文仲・藏武仲・孟公綽・子服景伯・[叔孫]武叔は俱に「魯大夫」と破く。甯武士・孔文子・蘧伯玉・史魚は俱に「衛大夫」と破く。令尹子文は「楚卿」と破く。子産・裨諶・世叔・子羽は「鄭大夫」と破く。

王孫賈・陽虎は「權臣」と破く。司敗・葉公・太宰・儀封人は俱に「時官」と破く。師冕・[大]師[の]摯・[亞飯の]干・[三飯の]繚・[四飯の]欽等<sup>など</sup>は俱に「樂官」と破く。臧倉・彌子瑕・王驪は「倖臣」と破く。

陳賈は「佞臣」と破く。胡鮪・莊暴は「齊臣」と破く。畢戰は「滕臣」と破く。

と破く。孫叔敖・百里奚は「霸佐」と破く。傳説は「殷相」と破く。  
林放・微生高・微生畝・尹士・周霄・景春は俱に「時人」と破く。或人は亦た「時人」と破く。長沮・桀溺・晨門・荷簣・楚狂〔接輿〕・丈人は俱に「隱士」と破く。

老彭は「昔賢」と破く。長息・公明高は「昔人」と破く。龍子は「古人」と破く。

楊朱・墨翟・許行・夷之は俱に「異端」と破く。陳良は「楚儒」と破く。

孟賁・烏獲・北宮黝・孟施舍は俱に「勇士」と破く。王良・奕秋は「藝士」と破く。淳于髡は「辯士」と破く。張儀は「説士」と破く。凡そ其餘は盡く載す可からざるは、皆な類推す可し。『大學』首章は「聖經」と破き、傳文は則ち「傳者」と破き、『中庸』は仍お「中庸」と稱し、記叙題は則ち記す者で破き、物類題なれば則ち物の字で破くが若し（『増註童子問路』卷一・一葉～三葉・「破題稱呼」条）。

聖人：孔子

聖：孔子の意味として、「聖心」・「聖教」・「聖言」・「聖容」のようにいう

至聖：孔子

大賢：顔子・曾子・子思・孟子・閔子騫・有若

賢者：冉伯牛・仲弓・南容・子夏・子貢・樊遲・子游・子路・子張・冉有・公治長・子賤・宰予・漆雕開・公西華・申枨・巫馬期・琴牢・曾皙・子羔・司馬牛

門人：申枨・子禽

聖嗣：伯魚

狂士：琴牢と曾皙

兩賢：孔子の弟子二人を並列して指す時

羣賢：孔子の弟子数人を指す時

門人：從・小子・二三子

門人：萬章・樂正子・公孫丑・陳臻・徐辟・充虞・高子・公都子・彭更・咸丘蒙・

桃應・屋廬子・陳代

唐帝：堯

虞帝：舜

二帝：堯・舜を並べて指す時

古帝：神農

夏王：禹

商王：湯

殷王：武丁

周王：文王・武王

三王：三代を並べて指す時

二聖：文王・武王を並べて指す時

虞臣：益契・皋陶

古聖：后稷

二聖：禹・稷を並べて指す時

元聖：伊尹・周公

古聖：伯夷・叔齊・柳下惠

古人：泰伯・虞仲・朱張・夷逸・微子・比干・箕子

霸主：齊桓公・晉文公・秦穆公

魯君：魯昭公・定公・哀公・繆公・平公

齊君：齊景公・簡公

梁王：梁惠王・襄王

齊王：齊宣王

滕君：滕定公・文公

儲君：滕定公・文公が世子の時

齊大夫：管仲・晏平仲・陳文子

魯大夫：季文子・季桓子・季康子・孟獻子・孟莊子・孟武伯・孟敬子・藏文仲・

藏武仲・孟公綽・子服景伯・叔孫武叔

衛大夫：甯武士・孔文子・蘧伯玉・史魚

楚卿：令尹子文

鄭大夫：子産・裨諶・世叔・子羽

權臣：王孫賈・陽虎

時官：司敗・葉公・太宰・儀封人

樂官：師冕・大師の摯・亞飯の干・三飯の繚・四飯の欵など

倖臣：臧倉・彌子瑕・王驩

佞臣：陳賈

齊臣：胡齮・莊暴

滕臣：畢戰

霸佐：孫叔敖・百里奚

殷相：傅說

時人：林放・微生高・微生畝・尹士・周霄・景春

時人：或人

隱士：長沮・桀溺・晨門・荷蓁・楚狂接輿・丈人

昔賢：老彭

古人：龍子

異端：楊朱・墨翟・許行・夷之

楚儒：陳良

勇士：孟賁・烏獲・北宮黝・孟施舍

藝士：王良・奕秋

辯士：淳于髡

說士：張儀

聖經：『大學』首章

傳者：『大學』首章以外

中庸：『中庸』



## (iv) 『蒔花小築牖蒙草』

江峯青（字は湘嵐。安徽婺源の人。光緒十二年丙戌科（一八八六）三甲五十三名の進士）の『蒔花小築牖蒙草』（光緒十九年（一八九三）刻：光緒十八年（一八九二）自序）では、「破題には直稱す可からず」として、題目にあらわれた固有名詞などをつぎのように言いかえるべきだという。

書中の古人 破題には直稱す可からず。孔子の如きは、「聖人」と稱す。羣聖と比べ列すれば、則ち「至聖」と稱す。顔子・曾子・子思・孟子・有子・閔子・伯牛・仲弓は俱に「大賢」と稱す。其の餘の孔子の弟子は皆な「賢者」と稱す。並列すれば則ち「兩賢」と稱す。多ければ則ち「諸賢」・「羣賢」と稱す。惟だ子路は又た「勇士」と稱し、子貢は又た「達士」と稱す。琴張・曾皙は又た「狂士」と稱す。伯魚は「聖嗣」と稱す。諸賢の弟子は「門人」と稱す。神農は「古帝」と稱す。堯は「唐帝」と稱す。舜は「虞帝」と稱す。堯・舜 合わして「二帝」と稱す。禹は「夏王」と稱す。湯は「商王」と稱す。武丁は「殷王」と稱す。文 [王]・武 [王] は「周王」と稱す。禹・湯・文 [王]・武 [王] は合わせて「三王」と稱す。微子は「王子」と稱す。周公は「元聖」と稱す。伊尹・箕子・[伯] 夷・[叔] 齊・柳下惠は「古聖」と稱す。公明儀・公明高・泰伯・比干・傅說・膠鬲・老彭・左邱明・龍子・周任等は「古賢」と稱す。太王・公劉・王季は「古侯」と稱す。益稷・契・皐陶は「帝佐」と稱す。齊桓 [公]・晉文 [公]・秦穆 [公] は「霸主」と稱す。諸侯は其の國に因りて「君」と稱す。[それは] 魯哀公の則ち「魯君」と稱するが如し。滕文公は世子と爲るときは「儲君」と稱す。公子糾は「齊公子」と稱す。戰國の諸侯は其の國に因りて「王」と稱す。[それは] 梁惠王の則ち「梁王」と稱するが如し。諸大夫は其の國に因りて「大夫」と稱す。[それは] 孟懿子の則ち「魯大夫」と稱するが如し。或いは「魯卿」・「魯臣」と稱す。管 [仲]・晏 [平仲]・舅犯・孫叔敖・百里奚は亦た「霸佐」と稱す。三家・陽虎・王孫賈は亦た「權臣」と稱す。祝鮀・陳賈・

臧倉・嬖奚は「佞臣」と稱す。宋朝・王驩・彌子瑕は「倖臣」と稱す。崔子・陳成子（陳恒）・桓魋・佛肸・公山弗擾は「叛臣」と稱す。凡そ國を<sup>たも</sup>有つこと、魯君等の如きは「時君」と稱す。凡そ官有ること、太宰等の如きは「時官」と稱す。凡そ官無きこと、林放等の如きは「時人」と稱す。或いは註に照らして「魯人」と稱す。師冕の諸々の樂官は「伶官」と稱す。[長]沮・[桀]溺の諸々の隱者は「隱士」と稱す。[狂]接輿は亦た「狂士」と稱す。亥唐は「晉賢」と稱す。陳良は「楚儒」と稱す。子濯孺子は「鄭將」と稱す。楊[朱]・墨[翟]・許行等は「異端」と稱す。涓于髡は「辯士」と稱す。陳仲子は「廉士」と稱す。孟賁等の力有る者は「力士」と稱す。宋輕等の遊説する者は「説士」と稱す。公輸子等の技藝有る者は「藝士」と稱す。象は「傲弟」と稱す。羿奡・共工等は「凶人」と稱す。章首に「曰」字無きは「記者」と稱す。「或曰」・「或問」は「或人」と稱す。「夏諺」・「傳曰」は「古語」と稱す。「南人有言」・「齊人有言」は「方言」と稱す。『大學』首章は「聖經」と稱す。餘は「傳者」と稱す。『中庸』の「子曰」と有る者は「聖人」と稱す。「子曰」と無き者は「中庸」と稱す。君子・小人・童子は俱に直稱す。鳥獸・草木・器用は俱に「物」と稱す。若し必ず分別すべきことあれば則ち飛ぶ者は「羽族」と稱し、甲ある者には「介族」と稱し、水に在るは「水族」と稱し、草木は「植物」と稱す。偏舉題なれば則ち直稱するも亦た可なり。（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・作文程式・一葉～三葉）。

聖人：孔子

至聖：孔子を他の聖人と比較して指す時

大賢：顔子・曾子・子思・孟子・有子・閔子・伯牛・仲弓

賢者：上記以外の孔子の弟子

兩賢：孔子の弟子二人を並列して指す時

諸賢：孔子の弟子数人を指す時

羣賢：孔子の弟子数人を指す時

勇士：子路

達士：子貢

狂士：琴張・曾皙

聖嗣：伯魚

門人：諸賢の弟子

古帝：神農

唐帝：堯

虞帝：舜

二帝：堯・舜を並列して指す時

夏王：禹

商王：湯

殷王：武丁

周王：文王・武王

三王：禹・湯・文武（文王・武王）をあわせて指す時

王子：微子

元聖：周公

古聖：伊尹・箕子・伯夷・叔齊・柳下惠

古賢：公明儀・公明高・泰伯・比干・傅説・膠鬲・老彭・左邱明・龍子・周任  
など

古侯：太王・公劉・王季

帝佐：益稷・契・皐陶

霸主：齊桓公・晉文公・秦穆公

某君：諸侯は「某君」とし、國名を上に加える

儲君：滕文公が世子の時

齊公子：公子糾

某王：戦国の時の諸侯は「某王」とし、國名を上に加える

某大夫・某卿・某臣：大夫は「某大夫」・「某卿」・「某臣」とし、國名を

上に加える

覇佐：管仲・晏平仲・舅犯・孫叔敖・百里奚

權臣：三家・陽虎・王孫賈

佞臣：祝鮀・陳賈・臧倉・嬖奚

倖臣：宋朝・王驩・彌子瑕

叛臣：崔子・陳成子（陳恒）・桓魋・佛肸・公山弗擾

時官：魯君など

時官：太宰等のように官爵がある人

時人・魯人：林放等のように官爵がない人。注に照らすと「魯人」とする

伶官：師曷の諸々の樂官

隱士：長沮・桀溺などの諸々の隱者

狂士：狂接輿

晉賢：亥唐

楚儒：陳良

鄭將：子濯孺子

異端：楊朱・墨翟・許行など

辯士：涪于髡

廉士：陳仲子

力士：孟賁等の力がある者

說士：宋輕等の遊説する者

藝士：公輸子等の技芸がある者

傲弟：象

凶人：羿莒・共工等

記者：最初に「曰」字がない者

或人：「或曰」・「或問」とある者

古語：「夏諺」・「傳曰」とある者

方言：「南人有言」・「齊人有言」とある者

聖經：『大學』首章

傳者：『大學』首章以外

聖人：『中庸』の「子曰」字がある者

中庸：『中庸』の「子曰」字のない者

君子・小人・童子は直稱する

物：鳥獸草木器用

[物を区別する場合]

羽族：飛ぶもの

介族：甲ある者

水族：草木

植物：水に在る者

偏舉題であれば直稱してもよい

最後に付け加えておくと、路德（字は閏生。陝西盩厔の人。嘉慶十四年己巳恩科（一八〇九）二甲七十七名の進士）は、必ずしもこうした規定にとらわれるべきではないという。

『孟子』（盡心上）「堯舜之仁不偏愛人」題で「至仁」[とあるの]は即ち堯・舜なり。[堯・舜の代字の]「古帝」・「二帝」の字様を用いる者に較べて、超脱（規則・形式にとらわれない）すること多し。學者は、死法（固定化された規則・形式）を拘守し、超脱に務めず、論語題に遇えば、破きて輒ち「聖人」の字を用い、孟子題に遭えば、破きて輒ち「大賢」の字を用う。その他の「魯君」・「衛卿」・「門人」・「時人」等の字は揺筆（筆を執る）すれば即ち来る。未だ曾て文を作らざるに先ず此の字有りて、必ず之を紙上に書せば、此の心 方に安んず。所以に句 冗長の語多く、支節（煩瑣）多し。此等の字様は、必ず萬に省く可からざる處に遇えば、方に之を用いるを許すを知らず。如果し省く可くして省くを以て高しと爲すに、省かざ

れば、超脱する能わざるなり（道光丁未〔一八四七年〕刊『時藝階』巻四・四十七葉・「堯舜之仁不偏愛人」条）。

『孟子』（盡心上）「堯舜之仁不偏愛人」題の破題で、「至人」とあるのは、「堯」・「舜」のことである。これは、ふつうに用いられる代字の「古帝」・「二帝」で「堯」・「舜」を破くのにくらべてより規則・形式にとらわれないものである。ふつうは、固定化された形式を守り、超脱を工夫せず、『論語』を題目とすれば「孔子」を「聖人」と破き、『孟子』を題目とすれば「孟子」を「大賢」とする。それ以外の「魯君」・「衛卿」・「門人」・「時人」等の代字は、筆を執った時に決まっている。文を作る前に、こうした文字があり、それを書き写せば、それで安心するのである。したがって、冗長の語が多く、煩瑣となるのである。こうした代字というものは、どうしても省くことができないところであれば、用いてもよいことを理解していない。だからといって、省くべきであり、省くのがすぐれているとかんがえられるのをそうしないと超脱できない、という。

（つづく）